

人々の考え・思いが、 「メディアにのる」ということ

～新聞投書欄をめぐる議論を振り返る・
「コメント・コメンテーター研究」の
一助として～

メディア研究部 谷 正名 / 東山浩太

筆者らは、現在、テレビのニュース・情報番組におけるコメンテーター、ネットニュースにおけるコメント欄とその機能についての研究を進めている。メディアの送り手側は、なぜ多くの番組でコメンテーターを出演させ、さまざまなリスクがあるにもかかわらずコメント欄を設けるのか。一方、受け手側にコメンテーター、コメント欄はどう見えており、どんな理由があつて見たり読んだりするのか。そうしたコメントの有する「価値」、および、送り手・受け手間の認識の「ずれ」を明らかにして、「人々の考え・思い」が、今までになくメディア上で可視化される現代の情報環境の特色をあぶり出すことを目的としている。

こうした情報環境は、インターネット常時接続が社会に浸透したことで本格化した。が、「人々の考え・思い」がメディア上で表現されること自体は、それ以前から行われていた。例えば、新聞における「投書欄」の存在はその典型と言える。本稿は、先行研究としての「新聞投書欄研究」をひもとく、当時の論点整理を現代のコメントをめぐる状況と比較することで、今後の研究の一助とすることを目的とする。

本稿では、『新聞研究』1968年10月号（日本新聞協会）掲載の「新聞投書欄特集」を材にとり、送り手である当時の新聞各社が、投書をどうとらえていたかを見ていく。

同号の出版されたタイミングは、戦後、全国紙などが投書欄を拡大した時期にあたる。新聞の投書欄は明治初期からあったが、この時期に冷戦に起因する国内外の激動に伴い、受け手である読者の投書熱が高まっていたことが背景にあるとされる。本稿で特に注目するのは、当時の投書の位置づけと、現代のネットニュースに関するコメントサービスの送り手側の認識や目指すところの、①共通すると思われる視点と、②異なると思われる視点、の両面である。

上記特集の中で最も紙幅が割かれているのは、朝日、毎日、読売、サンケイ、各新聞の編集委員らによる座談会である。そこから見いだせる①の1点目は、コンテンツとしての投書欄を重要視していることだ。読者はニュースに非常に敏感で、投書として反響があるまでの時間は短い——送り手である座談会参加者はこの認識を共有している。また、世相を背景に、投書欄を拡大すればそれだけ投書数も増加している点を踏まえて、彼らは投書欄に確かなニーズがあることを確認している。

ここで、朝日新聞の高松喜八郎は「世間常識のわくを越えた個性的な意見が望ましいし、言いつ放しではなく、なるべく議論を往復させてほしい」と述べ、投書欄が議論の場として機能することに期待を寄せている¹⁾。これは例えば、2015年9月、Yahoo! JAPANがネット上で示した同社のニュースのコメント機能（欄）が目指すところと一致している²⁾。曰く「多様な意見を知る、議論に参加する、自分の意思を表明する、といった体験をお届けする場」とし

たいということである。

また①の2点目は、送り手が投書に読者の「本音」を期待する傾向である。受け手は建て前のコメントより本音ベースのものに興味を惹かれる傾向はないだろうか。現代のネットニュースのコメント欄は、そのニーズを踏まえ、例えば投稿者が匿名も選べるようにするなど、その本音を引き出すよう設計されていると考えられるものがある。

54年前の座談会でも、この本音を歓迎する傾向を「投書の代弁機能」と称して価値を置いている。参加者からは、日本の新聞は読者層が広いがゆえ論調が当たり障りのないものになるとしたうえで、ニュース記事とは別に投書欄では標準的でない強烈な意見をぶつけ、読者の視野を広げる機会となつてほしい旨の期待が語られる。朝日の高松は『「声」欄の持っている一つの大きな意味は、新聞が端的に言えないことを投書欄が言っているということだ』と発言している³⁾。

一方で、②現代とは異なる視点、も見受けられる。それは、投書欄やコメントサービスに対する編集側の関与についてである。座談会によると、当時の投書欄ではニュース記事とその送り手である新聞に対する批判の投書は、めったに掲載しなかったという。読売新聞の芳賀繁之は「筋の通ったよいものは載せる方針だが、そのようなものはきわめて少なく、感情的なものや中傷が大部分だ」と話す⁴⁾。投書欄を編集側が考える「冷静で理論的な」場としたいという意識が読み取れる。

これに対し、再び例示すると、現代のYahoo! JAPANのニュースコメント機能が目指しているところはやや異なる。同社はわいせつや差別、過度な批判や誹謗中傷などのコメントを削除し

ているものの、基本的には表現の自由や思想・信条の自由の制限につながりかねない関与については慎重である。当然、同社のサービスや記事の配信元に対する批判コメントも掲載・公開されている。このように、投書に関する編集権の行使についての考え方に座談会当時と現代とでは、濃淡が見て取れるのである。

投書やコメント、すなわち「受け手の考えや思い」をメディアが取り上げることを送り手がどうとらえているかについて、過去と現在を比較してきた。ここまでで示唆されているとおり、従来の新聞投書欄はジャーナリズムの実践の中でとらえられ語られてきた。しかしそこでは、ニュース記事が「主」であり、投書・投書欄はその「反響」にすぎず、あくまで記事に「付随するもの」として位置づけられていることも垣間見える。ただし、それはあくまで54年前の「送り手」が、そうとらえていたにすぎない。

「コメント・コメンテーター研究」では、その現代的な位相を見据えるうえで、「現代の」「受け手」が、それをどうとらえているかに注目したい。また「現代の」「送り手」が、ここまで述べてきた、伝統的な「新聞の投書欄的な価値観」で、今なおコメントをとらえずぎているきらいはないか、上記の受け手のとらえ方との間にずれはないかを、改めて実証的に検討する機会と考え、取り組んでいこうと考えている。

(たに まさな/ひがしやま こうた)

注：

- 1) 『新聞研究』(1968年10月号) p33
- 2) 詳しくは下記を参照されたい。
https://news.yahoo.co.jp/newshack/newshack/yjnews_comment.html
- 3) 1と同 p34
- 4) 1と同 p34